

大学生の入学経路と進学意識についての一考察

—質問紙調査をもとに—

Students' Admission Types and Their Educational Aspiration: An Analysis of the Nichidai Bunri Survey

福田亘孝*¹⁾, 佐久間邦友²⁾, センチャンダ²⁾

¹⁾日本大学大学院文学研究科・青山学院大学, ²⁾日本大学大学院文学研究科教育学専攻博士後期課程

本稿では、日本大学文理学部の学生を対象にした調査を用いて、学生の進学経路の違いが大学への進学理由の分化にどのような影響を与えるのか多変量解析を用いて考察した。

分析結果によれば、第一に、出身高校は大学への進学理由、日本大学への進学理由にも影響を与えていなかった。第二に、入学方法は日本大学への進学理由には影響を与えていないが、大学への進学理由に影響を与えていた。第三に、学科系統は大学への進学理由、日本大学への進学理由ともに強く関連があり、特に社会系や理学系の学科の学生は、資格や免許取得といった目標をもって入学する傾向にあることが明らかになった。

キーワード：高等教育, 入学経路, 進学意識, 学生調査, FD

第1節：はじめに

日本における高等教育機関への進学者は過去数十年で著しく増大している。文部科学省の『学校教育基本調査』によれば高校から大学・短期大学への進学率は1980年には僅か8.3%にしか過ぎなかったが、2000年には33.6%に上昇し、2010年には44.5%にまで達している。マーチン・トロウ（1976）は大学適齢人口に対する高等教育機関の在籍者率が15%までを「エリート段階」、50%までを「マス段階」、50%以上を「ユニバーサル段階」と区別したが、これによれば日本の高等教育はほぼ「ユニバーサル段階」に突入していると言えよう。当然のことながら、大学進学率の上昇は学生数の増加という量的変化を高等教育システムにもたらす。しかし、同時に、質的变化も生じさせる。すなわち、進学率が15%までのエリート段階では少数の限られた集団だけが大学へ進学し、彼らが持っている社会経済的背景や進学目的・理由はかなり同質的である。しかし、進学率が50%を越えるユニバーサル段階では大学生の数が増大するだけでなく、学生のバック・グラウンド、入学経路、進学理由・目的が多様化する。それゆえ、ユニバーサル段階にあり高度に大衆化した大学では複数の選抜方式によって入学してくる多様な学生のニーズを見極めた上で、授業やカリキュラムを展開する必要がある。

しかしながら、これまで入学経路や選抜方式によって大学生の進学目的がどのように異なっているのか十

*E-mail: n-fukuda@pobox.com

投稿：2012年9月24日 受理：2013年1月12日

分に研究されていない。本研究では日本大学文理学部の学生を対象に行った調査（日大文理調査）データによって進学経路の違いが大学への進学理由の分化にどのように影響しているのかを明らかにする。本稿では、まず第2節で先行研究の検討を行う。次に、第3節で本稿の分析で使用するデータと方法について説明する。そして、第4節と第5節では調査データの分析によって大学への進学理由と入学経路の関係を明らかにする。最後の第6節では本研究の分析結果を要約し、今後の課題を提示する。

第2節：先行研究の検討

少子化が進行する中、日本における大学進学率はユニバーサルレベルに達した。このことによって、すべての大学が入学定員を確保することが困難になるとともに、旧来は見かけることが少なかった、新しいタイプの進学希望者や新入学者を大学が受け入れることになってきた。この大きな構造的な要因を背景に、受験のあり方も様変わりし、入学者選抜の多様化・弾力化が進行してきている。

大学進学ユニバーサル化や受験のあり方の変化は、進学者の意識や行動の面にどのような影響を与えているのか——この問題についての実証的な研究は、主に二つのテーマを中心に検討されてきた。

一つは、学力を重視しない入学者選抜で入学した者は、入学後の大学での学力（成績）が高いのか／低いのか、という問題である。

1980年代までの入学者選抜の多様化・弾力化の議論は、一元的なペーパーテストによる競争的入試への批判として提唱されたが、1990年代には推薦入試の拡大や入試科目の削減のような動きとして、そして2000年代にはアドミッション・オフィス（AO）選抜の導入と拡大の動きとして進展してきた。入試科目の削減には受験生の負担軽減を理由として掲げられ、推薦入試やAO入試の導入・拡大は、知識の量ではなく学習意欲やユニークな関心なども考慮に入れるという目的が掲げられてきた。

しかしながら、入試の多様化は、公的な目的で想定されているものとは逆に、進学者の意識や行動でマイナスの変化を生んでいる可能性もある。すなわち、試験で学力を確認しないAO入試や推薦入試などは、公的に掲げられた目的とは裏腹に、現実には、少子化の中での受験生や入学者を確保するための簡便な手段として、特に中堅・底辺大学で安易に使われてきている。そのため、かつての入試体制では保持されていたスクリーニングの機能がうまく働かず、結果的に大学の質を低下させている、という可能性である。入試の多様化によって、学力だけでなく多面的な基準で入学者を選抜することで、大学教育の質向上に資するという議論もできるし、「大学の生き残り」という文脈が作用して、入試の多様化が進学者の意識や行動の面で問題を生んでいる、という議論もできるわけである。

そして、推薦入試やAO入試では学力が重視されないために入学後に学力不足に陥っているという見方は人口に膾炙しており、中教審でも近年の改革論の一つの大前提のようにされているけれども（2008年のいわゆる「学士課程答申」など）、それ自体検証が必要な問題なのである。

AO入試や推薦入試の入学者の入学後の学力（成績）を調べた研究をみていくと、その結論は、まだバラバラである。北海道大学薬学部における平成13年度AO入学者のうち、平成16年度に卒業した71名を対象にした池田・鈴木・加茂（2007）によるAO入学者の追跡調査によれば、AO入学者は一般入試による入学者よりも成績が良好であることは検証できないが、成績のばらつきが大きい。結果として、AO入学者と一般入学者とは何らかの差異があると結論づけた。また、同志社大学社会学部の事例を検討した西丸（2010）は、推薦・AO入試・内部推薦の学生は、一般入試の入学者と平均点では違いがないけれども、授業に真面目に取り組んでいるのと、女子が多いため（男子は学力が低い）だということを報告している。それらに対して、池田（2009）や太田（2012）の研究では、AO入試や推薦入試による学生は一般入試入学者と比べて

入学後の学力はあまり違いがないということが強調されている。まだ結論は出せる段階ではないし、そもそも、これらの諸研究は、研究対象となった大学や学部の個別の状況が大きく影響しているために、日本の大学全体での議論に一般化するにはまだ知見が不十分である。つけ加えておけば、このように実証研究が少しずつ出てきている中で、入学後の学力不足の問題を防ぐために、AO入試や推薦入試で入学することが決まった学生に、あらかじめ援助教育を行ったり、学習意欲を高める教育方法を開発するなどの個別大学の試みの方が急速に進んでいる（奥田，2011；牧野，2011；太田，2012）。

もう一方で、大学進学の原因（動機）と入学後の意識や行動との関連を探る研究がさまざまになされてきている。進学理由（動機）のちがいが、入学後の適応（学業に取り組む態度や、学習意欲、授業選択態度、大学で重視している活動、学生生活の充実度と出席率、学習観、生活意識の変化、心理的ストレス反応など）にどう影響しているのかを探る研究である（五十嵐と浅岡，2001；技廣，2001；谷田，2002；松島と尾崎，2005；半澤，2006；長澤，2007；望月，2012；三保と清水，2011）。

たとえば、半澤（2006）は、佐藤（2001）、麻生・潮木（1977）、柳井ら（1989）、古市（1993）などの他の研究を踏まえて、大学進学の原因として学業を重視するもの、有利な就職の機会を得たいというもの、友人関係を広げたいというものを区別し、時間軸（過去と現在との関連）の視点から、大学進学原因とその後学業適応との関連について検討している。その結果は、入学時点で学業を重視した目標を持った学生は、「目的・目標を持って学業に取り組んでいる」という現在の学業取り組み態度と関連して、学業意欲低下も大きくない。

しかしながら、これら二つの研究テーマでは、考えるべき重要な課題がカバーできていない。それは、多様な入学者選抜のやり方と、大学進学の原因（動機）との関連である。多様な入学者選抜のやり方は、単に入学後の学力とのみ関わるわけではないし、それぞれの大学がどういう大学進学の原因（動機）を持った者を入学させるのかは、入学後の指導の問題以前に、入学者選抜の方法の制度の問題であるはずである。そうであるとすると、多様な入学者選抜のやり方と、大学進学の原因（動機）との関連を明らかにすることは、大学が入学者選抜の仕組みや指導のあり方を考えるうえで有益なことであろう。

大学進学原因と入試の多様化との関連についての研究は、蓄積は乏しいが、ないわけではない。望月（2008）は特別選抜入試を受験する予定の高校生の大学進学アスピレーションを調べて、特別選抜入試、特にAO入試の拡大により、中下位校に在籍する生徒も、大学進学に対する高い意識をもった上で国公立大学に目を向けている、と述べている。しかし、高校生を対象にした望月の研究は、塾・予備校の夏期講習を受講している者を調査対象としているために、偏った層をとらえているにすぎない。また、三保・清水（2011）は、一般入試を経た者よりも指定校推薦で入学した学生の方が、進学原因として勉強志向が低く、遊び志向が多いことを明らかにしている。だが、三保らの研究は大阪府内の総合私立大学1校の1年次生を対象とした調査結果にすぎないため、簡単に一般化することには慎重でなければならない。

本研究はこうした先行研究の乏しさを踏まえて、日本大学文理学部の学生を対象にした調査から、大学進学原因と入試形態との関連を調査し、入試経路の違いが大学進学原因の分化にどのように影響しているのかを考察する。

第3節：データと方法

本稿の分析で使用する調査（日大文理調査）の実施時期、調査対象と調査票の配布・回収の方法は次の通りである。また、回収された調査票の学科、性別、学年別人数の詳細は注に示したとおりである¹。

調査時期：2012年6月

調査対象：調査の対象者は日本大学文理学部の全学科（17学科）の学部生1,000人。

調査方法：調査票は各学科（史学科、心理学科と化学科を除く）の事務室に依頼して、対象者に配布し、事務室で回収した。史学科、心理学科、化学科はそれぞれの学科から許可を得て、廊下で調査票を配布し、教育学科事務室に設置した回収ボックスに提出するように依頼した。調査票は自記式で、配布・回収期間は一週間で、362人（男性：184人、女性：178人）から回答を得た（回収率は36.2%）。

調査に際して、学科、学年の人数（現員数）に比例するように調査票の数を厳密に割り当てて配布した。しかしながら、調査票の配布・回収期間を一週間に限定せざるを得なかったため、回収された調査票は予定した回収率よりも低く、しかも学科や学年に関してかなりの偏りができてしまった。そのため、学科別の分析を断念して、人文系・社会系・理学系の3つの大きなグループにまとめて考察するなど、分析の方法を工夫するとともに、データの解釈においてもサンプルの偏りに配慮をしながら進めた。また、調査票では、本研究の目的をふまえ、大学進学の原因、日本大学への進学理由について詳細に尋ねた。加えて、調査対象者の基本属性として、性別、所属学科、学年、浪人年数、入試の形態、出身校のタイプ、親の最終学歴についても調べた。

本稿では、最初に単変量分析によって大学進学の原因と日本大学への進学理由の特徴を明らかにする。続いて、二変量分析によって入試形態、入学経路と進学理由の関連について検討する。そして、最後に大学進学の原因と日本大学への進学理由の規定要因を多変量解析によって分析する。

第4節：入学経路と進学理由

本節では、文理学部の学生の入学経路と進学理由の関連について分析する。最初に、(1) 入学経路 (2) 大学に進学した理由 (3) 日本大学に進学した理由の3つについて、全国調査や日本大学全体の調査と比較しながら文理学部の学生の特徴を考察する。次に、出身高校や入学方式の違いが進学理由とどのように関係しているか検討する。

(1) 入学経路

入学経路の違いについては、本稿では出身高校と入学者選抜の方法（以下「入学の方法」）の2つを取り上げる。本調査の出身高校をみると、文理学部では国立・公立の一般高校が45.6%、日本大学付属校が24.9%で、これら2つの集団で入学者の大半が占められる。『日本大学学生生活実態調査（以下、実態調査）』（2009年）によって日本大学全体の入学者の出身校と比べると、国立・公立の一般高校が44.2%、日本大学付属校が26.5%であり、出身高校の比率は両者でほぼ同じである。

次に、入学の方法についてみると、本調査では一般入試が58.8%、付属校からの推薦入試が21.5%で、これら2つを合計すると入学者の8割を占めている。推薦入学には付属校からの推薦のほか、指定校推薦や保健体育審議会推薦²などもあるが、これらの占める割合は入学者全体の中の数パーセントに過ぎない。2011年度の全国のデータでは、一般入試55.7%、推薦入試35.1%、アドミッション・オフィス（AO）入試8.7%となっており³、文理学部は全国平均よりAO入試の比率が低い。しかし、一般入試と推薦入試との割合に関しては日本の大学全体の平均に近づいている（表1参照）。

表1：入学経路の比較 (%)

	本調査	実態調査 (全体)	実態調査 (文理)	答申 (2011年)
一般入試	58.8	42.3	56.0	55.7
推薦入試	25.4 (21.5)	41.0	31.7	35.1
AO入試	1.7	5.7	9.6	8.7
その他	6.4	1.7	0.6	0.6

(各資料参照のうえ、筆者作成)

(2) 大学に進学した理由

今回の調査では進学理由（進学動機）は、「大学に進学した理由」と「日本大学に進学した理由」の2つを尋ねている。「大学に進学した理由」については、10個の選択肢から、回答者に進学した一番の理由、二番の理由、三番の理由の3つを選んでもらった。そして、第一番目で選ばれた項目には3点、第二番目には2点、第三番目には1点を与え、それらを回答者ごとに合計し、「大学進学理由得点」とした。

最初に文理学部の学生が大学進学理由として何に重点を置いていたのか検討するために、項目ごとに大学進学理由得点の平均値を計算した。まず目を引くのは、「大卒の学歴がほしいから (1.17点)」と「将来の仕事に役立つ勉強がしたいから (1.03点)」の二つが高い値を示している点である。反対に、平均値が低いものは、「先生や家族が勧めるから (0.18点)」や「自由な時間を得たいから (0.27点)」は平均値が非常に低かった。

ほぼ同じ選択肢で全国の大学生約6,500人を対象にベネッセが調査した結果⁴では、①「将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」、②「専門的な研究がしたいから」、③「幅広い教養を身につけたいから」、④「大卒の学歴がほしいから」の順番になっている。このベネッセの調査は、本調査とは回答・集計方法が異なっており、各項目に関して「とてもあてはまる」から「ぜんぜんあてはまらない」までの4つの選択肢のうち「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の回答を合計したものの順位であるため、本調査と単純な比較はできない。

しかし、両者がともに進学理由の重点の順位を示していると考えれば、文理学部の学生の進学理由の特徴は、「将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」という学生よりも「大卒の学歴がほしいから」という学生が多い点である。

本調査で対象となった文理学部は人文科学、社会科学、自然科学に属する17学科から構成され、学科ごとにカリキュラムや進路は大きく異なっている。このため、大学進学理由得点が学科によって大きく異なってしまう可能性がある。この点を検討するため、17の学科の特徴に配慮しつつ、17学科を人文系・社会系・理学系にまとめて大学進学理由得点の平均値を求めた（表2参照）。また、結果の解釈をわかりやすくするために、「10. その他」以外の選択肢を「知識探究型」「目的曖昧型」「職業志向型」「他者追随型」4つにカテゴライズして分析を行う。4つのカテゴリを具体的に示すと、知識探究型は、「2. 専門的な研究をしたいから、3. 幅広い教養を身につけたいから」、目的曖昧型は、「1. 大卒の学歴がほしいから、6. 自由な時間を得たいから、7. すぐに社会に出るのが不安だから」、職業志向型は、「4. 資格や免許を取得したいから、5. 将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」、他者追随型は「8. 先生や家族が勧めるから、9. 周囲の人がみな行くから」である。明確な目的がある進学動機をもっていた者は、その目的に沿って、知識探究と職業志向とに分けることができよう。また、目的が不明確なまま進学した者については、周囲の人の言動など外部からの影響を受けた進学者と、目的が曖昧なまま自分で選んだ者とを区別することができる。それがこの4類型である。

表2：所属学科と大学進学理由得点（点）⁵

	大卒の学歴がほしいから	専門的な研究がしたいから	幅広い教養を身につけたいから	資格や免許を取得したいから	将来の仕事に役立つ勉強がしたいから	自由な時間を得たいから	すぐに社会に出るのが不安だから	先生や家族が勧めるから	周囲の人がみな行くから
人文系 (N=149)	1.23	0.66	1.14	0.50	0.91	0.32	0.52	0.17	0.31
社会系 (N=111)	1.01	0.42	0.64	1.29	1.15	0.20	0.37	0.14	0.23
理学系 (N=101)	1.23	0.55	0.87	0.98	1.06	0.27	0.26	0.23	0.34
無回答 (N=1)	3.00	0.00	0.00	0.00	1.00	2.00	0.00	0.00	0.00
Total (N=362)	1.17	0.56	0.91	0.87	1.03	0.27	0.40	0.18	0.29

出典) 本調査より独自に集計

表2をみると、人文系では、「大卒の学歴が欲しいから（1.23点）」と「幅広い教養を身につけたいから（1.14点）」の数値が高い。この2つの選択肢は社会系、理学系と比較しても高い数値であり、同じ知識探究型の「専門的な研究がしたいから（0.66点）」や目的曖昧型の「自由な時間を得たいから（0.32点）」、「すぐに社会に出るのが不安だから（0.52点）」も同様に社会系、理学系よりも一番高い。つまり、人文系の学生の進学理由は、目的曖昧型と知識探究型が多いと言える。社会系では、職業志向型に分類した「資格や免許を取得したいから（1.29点）」、「将来の仕事に役立つ勉強がしたいから（1.15点）」が他の系統よりも高い数値であることが目立っている。特に「資格や免許を取得したいから」は、社会学科の0.29点を除く社会系すべての学科では1.2点以上の値であった。おそらく、これは教育学科や体育学科には、教員免許状を求める学生が、心理学科には認定心理士という職業に直結した資格をめざす学生が入学してきているのに対して、社会学科は資格や免許とは無縁な動機で入学する学生が多いからではないだろうかと推察される。最後に理学系は、他者追従型の「先生や家族が勧めるから（0.23点）」、「周囲の人がみな行くから（0.34点）」の数値が他の系統よりも高いことから、理学系の学生の進学理由は、他者追従型の傾向があると言えよう。

これらの分析結果を見る限り、文理学部の学生の大学進学理由は「大卒の学歴がほしいから」という目的曖昧型の学生もいるが、全体として、人文系の学生は、専門的な研究や教養を目的とした「知識探究型」、社会系の学生は、将来の職業や資格取得を重視した「職業志向型」、理学系は、他者の行動や助言に左右される「他者追従型」になる傾向が見られた。

(3) 日本大学に進学した理由

「日本大学に進学した理由」については、11個の選択肢から回答者に重視した理由を1位から3位まで順位をつけて選んでもらった。そして、「大学に進学した理由」と同様のやり方で回答に3点、2点、1点を割り当て、それを合計した値を作り、「日大進学理由得点」とした。ここでも「大学進学理由得点」と同様に、文理学部の学生が日本大学進学理由として何に重点を置いていたのか検討するために、項目ごとに日大進学理由得点の平均値を計算した。

まず、すべての選択肢のうち平均点が高い選択肢は、「学びたい科目（学問分野）があったから（1.34点）」と「希望した大学に入れなかったから（1.33点）」の2つである。逆に平均値が低いものは、教育環境重視型に属する「大学院が設置されているから（0.01点）」、「教わりたい教員がいたから（0.06点）」であった。

この結果を『実態調査』における調査と比べると、日本大学全体では、「希望した大学に入れなかった（25.7%）」が最も多く、次いで「規模が大きいから（20.8%）」、授業内容に関する選択肢の「講義科目が充実（4.3%）」の順であった。つまり、実態調査と本調査どちらでも希望した大学に入学できなかったという前提のもと、文理学部では学びたい科目（学問分野）があり入学する傾向が強いものに対して、日本大学全体では規模が大きいからというブランドイメージによって日本大学に入学する傾向が強い。したがって、文理学部で

表3：所属学科と日大進学理由得点（点）⁵

	学びたい 科目(学 問分野) があった から	教わりた い教員が いたから	有名な大 学だから	入りたい 部活動・ クラブ・ サークル があるか ら	希望した 大学に入 れなかつ たから	日大の付 属高校生 だったか ら	就職のた めの支援 が充実し ているか ら	大学院が 設置され ているか ら	授業料が 安いから	欲しい資 格や免許 がとれる から
人文系(N=149)	1.25	0.12	0.72	0.16	1.52	0.66	0.32	0.00	0.31	0.30
社会系(N=111)	1.32	0.02	0.53	0.60	1.23	0.41	0.23	0.02	0.11	1.02
理学系(N=101)	1.50	0.03	0.64	0.13	1.17	0.55	0.37	0.03	0.21	0.64
無回答(N=1)	2.00	0.00	0.00	0.00	1.00	0.00	3.00	0.00	0.00	0.00
Total(N=362)	1.34	0.06	0.64	0.29	1.33	0.55	0.31	0.01	0.22	0.62

出典) 本調査より独自に集計

は日本大学へ何か目的を持って入学するという進学者が多いと言える。

日大進学理由得点も大学進学理由得点と同様に、学科によって全く異なる可能性がある。そこで、人文系・社会系・理学系にまとめて、それぞれの平均値を表3に示した。また、「大学進学理由得点」と同様に「11. その他」以外の選択肢を「目的追求型」「教育環境重視型」「妥協進学型」「ブランド選択型」の4つにカテゴリ化した。すなわち、目的追求型は大学入学後の明確な活動を考えて日本大学を選んだタイプで、「1. 学びたい科目(学問分野)があったから、4. 入りたい部活動・クラブ・サークルがあるから、10. 欲しい資格や免許がとれるから」のいずれかに回答した者をグループとしてまとめた。同様に、教育環境重視型は日本大学の人員や設備などの教育環境を理由に挙げた者で「2. 教わりたい教員がいたから、7. 就職のための支援が充実しているから、8. 大学院が設置されているから、9. 授業料が安いから」の回答者をまとめた。妥協進学型は「5. 希望した大学に入れなかったから」の回答者であり、日本大学への進学を望んでいたわけではない者である。ブランド選択型は日本大学の系列校からの進学者や知名度で選んだ者で、「3. 有名な大学だから、6. 日大の付属高校生だったから」があてはまる。

表3をみると、人文系ではブランド選択型に分類した「有名な大学だから(0.72点)」と「日大の付属高校生だったから(0.66点)」が他系統よりも高い点数であった。このことから、人文系の学生は大学の進学に際して「日本大学」というブランド力が影響したと推測される。社会系では目的追求型の「欲しい資格や免許がとれるから(1.02点)」や「入りたい部活動・クラブ・サークルがあるから(0.60点)」が他系統より高い数値であった。特に社会系に分類した各学科を見ると、社会学科の0.24点を除きすべて1.0点以上の値であった。おそらく、大学進学理由と同様に、社会系の各学科では資格取得に深く関連する学科であるかが強く影響していると考えられる。また、「入りたい部活動・クラブ・サークルがあるから」は、社会学科0.48点、教育学科0.11点、心理学科0.0点であるのに対して、体育学科1.02点であり、体育学科の影響が強いと思われる。理学系では、目的追求型の「学びたい科目(学問分野)があったから(1.50点)」と教育環境重視型の「就職のための支援が充実しているから(0.37点)」が他系統と比べると高い平均値であった。つまり、文理学部の学生が日本大学に進学する理由の多くは、「希望した大学に入れなかったから」という「妥協進学型」ではあるものの、学科系統別に見ていくと、人文系では「ブランド選択型」、社会系では「目的追求型」、理学系では「教育環境重視型」という3つの傾向に分かれていると言えよう。

(4) 出身高校と進学理由の関係

出身高校と「大学進学理由得点」との関係を表4で見よう。まず最も興味深いのは、知識探究型の「幅広い教養を身につけたいから(0.96点)」と職業志向型に分類した「資格や免許を取得したいから(0.92点)」、「将来の仕事に役立つ勉強がしたいから(1.15点)」の平均値が日本大学付属校を含む私立高校よりも国公立高校で高いことである。逆に、知識探究型とした「専門的な研究がしたいから(日大付属0.61点、私立0.63点)」

表4：出身高校と大学進学理由得点（点）⁶

	大卒の学歴がほしいから	専門的な研究がしたいから	幅広い教養を身につけたいから	資格や免許を取得したいから	将来の仕事に役立つ勉強がしたいから	自由な時間を得たいから	すぐに社会に出るのが不安だから	先生や家族が勧めるから	周囲の人がみな行くから
国公立高校 (N=165)	1.19	0.47	0.96	0.92	1.15	0.20	0.42	0.14	0.28
日大付属高校 (N=90)	1.14	0.61	0.79	0.87	1.10	0.30	0.39	0.19	0.32
私立高校 (N=93)	1.22	0.63	0.85	0.83	0.78	0.38	0.37	0.26	0.29
その他 (N=14)	0.79	0.71	1.50	0.71	0.71	0.21	0.36	0.00	0.21
Total (N=362)	1.17	0.56	0.91	0.87	1.03	0.27	0.40	0.18	0.29

出典) 本調査より独自に集計

他者追従型の「先生や家族が勧めるから（日大付属 0.19 点, 私立 0.26 点）」と「周囲の人がみな行くから（日大付属 0.32 点, 私立 0.29 点）」の値が、国公立高校よりも日本大学付属校を含む私立高校では高い。

この結果から、国公立高校出身者の多くは「教養を身につけたい」や「資格・免許取得」という知識探究型と職業志向型の学生であるのに対して、日本大学付属校などの私立高校は「専門的な研究」を目的とする知識探究型や「家族の勧め」や「周囲の人々に追従」という他者追従型の学生であると言えよう。

次に、出身高校と「日大進学理由得点」との関係を表5で見ると、日本大学付属校ではブランド選択型に分類した「日大の付属高校生だったから（2.21 点）」が最も高い平均値であることが目立つ。逆に、妥協進学型に分類した「希望した大学に入れなかったから」の平均値は、日本大学付属校（0.24 点）よりも国公立高校（1.72 点）と私立高校（1.74 点）の方が高い。従って、日本大学付属校生は「ブランド選択型」として、他方、国公立高校生や私立高校生は「妥協進学型」として文理学部に入学する傾向がある。

『実態調査』では、「希望した大学に入れなかったから」という回答は全学平均で 25.7% であり、付属校以外からの受験者にとっては、文理学部の中にある学科は、首都圏の少しランクの高い他大学に類似の学部や学科があるため、「滑り止め」として利用される傾向が見られる。一方、大学側から見ると、文理学部を特色ある魅力をアピールできていないために、「どうしてもここに入りたい」という積極的で具体的な動機を受験生に与えることに成功していないと言える。これは、本調査の結果でも出身高校のタイプにかかわらず、「教わりたい教員がいたから」とか「大学院が設置されているから」「就職のための支援が充実しているから」などの項目の得点がそろって非常に低いことと合致する。要するに、受験生のほとんどは、文理学部にどんな教員がおり、どういう組織になっており、どのような指導がなされているのか知らない状態で入学する傾向が極めて強い。従って、他学部で同様の検証を試みる必要があるが、少なくとも、多くの受験生に文理学部の様子が伝わっていないことは間違いないであろう。

表5：出身高校と日大進学理由得点（点）⁶

	学びたい科目(学問分野)があったから	教わりたい教員がいたから	有名な大学だから	入りたい部活動・クラブ・サークルがあるから	希望した大学に入れなかったから	日大の付属高校生だったから	就職のための支援が充実しているから	大学院が設置されているから	授業料が安いから	欲しい資格や免許がとれるから
国公立高校 (N=165)	1.40	0.09	0.68	0.21	1.72	0.00	0.33	0.01	0.30	0.70
日大付属高校 (N=90)	1.34	0.03	0.51	0.27	0.24	2.21	0.28	0.01	0.10	0.58
私立高校 (N=93)	1.27	0.03	0.70	0.38	1.74	0.00	0.29	0.02	0.19	0.55
その他 (N=14)	1.14	0.14	0.64	0.71	0.93	0.00	0.50	0.00	0.21	0.36
Total (N=362)	1.34	0.06	0.64	0.29	1.33	0.55	0.31	0.01	0.22	0.62

出典) 本調査より独自に集計

(5) 入学の方法と進学理由の関係

続いて、入学の方法と進学理由の関係について分析しよう。まず、入学方式と「大学進学理由得点」との関係を表6で見ると、一般入試やセンター試験利用入試では、「大卒の学歴が欲しいから（一般1.17点、センター1.57点）」や「自由な時間を得たいから（一般0.26点、センター0.46点）」、「すぐに社会にでるのが不安だから（一般0.45点、センター0.21点）」など目的曖昧型の選択肢の平均値が高い。一方で付属校推薦をはじめとする推薦制度を利用している層は、職業志向型に分類した「将来の仕事に役立つ勉強がしたいから（付属推薦1.15点、付属外推薦0.57点）」、「資格や免許を取得したいから（付属推薦0.86点、付属外推薦1.14点）」の平均値が高い。また、「幅広い教養を身につけたいから」などの知識探究型の目的で大学進学をした学生は、一般入試（0.96点）できた学生が多く、他者追従型の選択を選んだ学生は推薦制度を利用して入学した学生がやや多い。

以上のことから、「大卒学歴取得」などの目的曖昧型の大学進学理由は一般入試やセンター試験利用入試で入学した学生に多く見られ、推薦制度を利用した学生の多くは「将来の仕事に役立つ勉強がしたい」、「資格や免許を取得したい」という職業志向型の学生であると言える。

続いて、入学の方法と「日大進学理由」の関係について表7で検討しよう。まず注目すべき点は、一般入試とセンター試験利用入試で入学した場合に「希望した大学に入れなかったから（一般1.90点、センター2.11点）」の値が高いことである。一方、付属校推薦では「日大の付属高校生だったから（2.27点）」の値が非常に高くなっている。これらの結果から見ると、日本大学への進学理由として、一般入試とセンター試験利用入試の学生は妥協進学型、付属校推薦の学生はブランド選択型の傾向がある。また、「欲しい資格や免許がとれるから（付属推薦0.59点、付属外推薦1.14点）」や「学びたい科目（学問分野）があったから（付

表6：入学方法と大学進学理由（点）⁷

	大卒の学歴がほしいから	専門的な研究がしたいから	幅広い教養を身につけたいから	資格や免許を取得したいから	将来の仕事に役立つ勉強がしたいから	自由な時間を得たいから	すぐに社会に出るのが不安だから	先生や家族が勧められるから	周囲の人から
一般入試(N=213)	1.17	0.45	0.96	0.89	1.09	0.26	0.45	0.13	0.33
センター試験利用入試(N=28)	1.57	1.18	1.00	0.54	0.46	0.46	0.21	0.11	0.18
AO入試(N=6)	0.83	0.50	1.00	1.00	1.50	0.00	0.17	0.50	0.00
付属校推薦(N=78)	1.12	0.59	0.71	0.86	1.15	0.29	0.42	0.21	0.35
付属校以外の推薦(N=14)	1.50	0.36	1.14	1.14	0.57	0.29	0.21	0.21	0.21
その他(N=23)	0.74	0.83	0.83	1.00	0.87	0.09	0.22	0.48	0.04
Total(N=362)	1.17	0.56	0.91	0.87	1.03	0.27	0.40	0.18	0.29

出典) 本調査より独自に集計

表7：入学方法と日大進学理由（点）⁷

	学びたい科目(学問分野)があったから	教わりたい教員がいたから	有名な大学だから	入りたい部活動・クラブ・サークルがあるから	希望した大学に入れなかったから	日大の付属高校生だったから	就職のための支援が充実しているから	大学院が設置されているから	授業料が安いから	欲しい資格や免許がとれるから
一般入試(N=213)	1.38	0.06	0.69	0.09	1.90	0.02	0.33	0.02	0.21	0.63
センター試験利用入試(N=28)	1.25	0.14	0.68	0.21	2.11	0.07	0.18	0.00	0.54	0.25
AO入試(N=6)	1.83	0.33	0.50	1.00	0.00	0.67	0.00	0.00	0.17	0.67
付属校推薦(N=78)	1.28	0.04	0.54	0.27	0.17	2.27	0.28	0.01	0.12	0.59
付属校以外の推薦(N=14)	1.50	0.00	0.64	0.43	0.07	0.57	0.57	0.00	0.29	1.14
その他(N=23)	1.13	0.09	0.48	1.96	0.17	0.13	0.30	0.00	0.22	0.70
Total(N=362)	1.34	0.06	0.64	0.29	1.33	0.55	0.31	0.01	0.22	0.62

出典) 本調査より独自に集計

属推薦 1.28 点, 付属外推薦 1.50 点)」などの目的追求型の平均値は, 一般入試などの学生よりも推薦制度を利用した学生のほうが高い。しかし, 「入りたい部活動・クラブ・サークルがあるから (一般入試 0.09 点, センター利用 0.21 点, 付属校推薦 0.27 点, 付属校以外の推薦 0.43 点)」は, 推薦で入学した者の得点が若干高いが, この結果は体育学科の数値が大きく影響していると考えられる。

最後に, 教育環境重視型に分類した選択肢 (「教わりたい教員がいたから」, 「就職のための支援が充実しているから」, 「大学院が設置されているから」) は, 一般入試, 推薦制度のどちらでも平均値が低い。これは自分の進学希望先の教員やカリキュラムについて詳しく知らないまま進学先が決められていることを示唆している。もちろん, 一般入試を利用する大多数の受験生は付属校以外の出身者であり, オープンキャンパスや大学案内のみでしか知ることが出来ない。しかし, 付属校は日本大学の教育環境などの情報を得る機会を多分に得ているにもかかわらず, その機会を生かしきれていないとも言えるのではないだろうか。

本節では進学経路と進学理由との関係を見てきたが, 国公立や私立の高校出身者, 一般入試やセンター入試を受けた者では, 志望校に入れなくてやむをえず文理学部に入学する妥協進学型の者が多く, 付属校・付属推薦を受けた者では, 進学先を入念に検討することもなく, 漠然とした印象程度で進学先を選んでいる者が多い傾向が見られた。また, 人文系では大学への進学目的が曖昧の者も多いけれども知識探究心のある者も比較的多く, 社会系では職業志向の者が比較的多いことも明らかになった。次節では, 多変量解析を用いた分析で, 進学経路と進学理由の関係を, もう少し掘り下げていくことにしたい。

第5節 多変量解析による分析

前節では大学への進学理由を (1) 知識探究型 (2) 目的曖昧型 (3) 職業志向型 (4) 他者追随型の4つのタイプに分けて文理学部の学生の特徴を吟味した。同様に, 日本大学への進学理由についても (1) 目的追求型 (2) 教育環境重視型 (3) 妥協進学型 (4) ブランド選択型の4つに分類して分析を行った。本節ではロジスティック回帰分析による多変量解析によって上記の進学理由を規定する要因について検討する⁸。ロジスティック分析は従属変数が二値変数を取る場合に用いられる分析で, 一般的には $\log\left(\frac{q}{1-q}\right) = \alpha + \beta_i x_i$ で

表現される。ここで, q は従属変数が 1 を取る確率であり, α は定数項, x_i は独立変数, β_i は独立変数の偏回帰係数である。本分析では, 大学への進学理由に関して4つ, 日本大学への進学理由についても4つの二値変数を作り, これらを従属変数として分析を行う。具体的には, 大学へ進学する理由の第1位に「専門的な研究をしたい」あるいは「幅広い教養を身につけたい」を選択している学生を知識探究型, それ以外の選択肢を回答している学生を非知識探究型と考えた。そして, 前者の場合に値に 1 をとり, 後者の場合に 0 をとる二値の従属変数を作った。同様に, 「大卒の学歴がほしい」, 「自由な時間を得たい」, 「すぐに社会に出るのが不安」を第1位に回答している場合に目的曖昧型, 「資格や免許を取得したい」あるいは「将来の仕事に役立つ勉強がしたい」を選択している回答者を職業志向型とした。そして, それぞれの型に該当する学生には 1, それ以外は 0 を持つ二値変数を作成し従属変数とした。他者追随型については, 「先生や家族が勧める」あるいは「周囲の人がみな行くから」を第一の理由に回答している学生が極めて少なかったので分析からは除いた。

日本大学への進学理由についても, 同様の方法で, 日本大学に進学した理由の第1位として「学びたい科目があった」, 「入りたい部活動・クラブ・サークルがある」, 「欲しい資格や免許がとれる」のいずれかを回答している学生を目的追求型とした。また, 第1位に「教わりたい教員がいた」, 「就職のための支援が充実している」, 「大学院が設置されている」, 「授業料が安い」を選択している学生を教育環境重視型, 「希望し

た大学に入れなかったから」を回答した学生を「妥協進学型」, 「有名な大学だから」あるいは「日大の付属高校生だったから」を一位に選んだ学生をブランド選択型とした。そして、それぞれの型に当てはまる場合に1を取り、当てはまらない場合には0を取る二値の従属変数を4つ作成し従属変数とした。

前節の分析では出身高校, 入学方式, 学科系統によって大学や日本大学への進学理由に違いがみられたので、これら三つの変数を回帰モデルの独立変数に用いた。しかし、予備的な分析では出身高校と入学方式の相関が極めて高いことが観察されたため、両方の変数を同時に独立変数としてモデルに投入するとパラメーターの推定値が共線性によって不安定なる可能性がある。この点を考慮して、この二つの変数を交互に入れ換えてロジスティック回帰分析を行った。さらに、父親の最終学歴(大学・大学院で1, それ以外で0を取るダミー変数)を学生のバック・グラウンドの変数として独立変数に含めた。また、コントロール変数として回答者の学年, 性別(男性=1, 女性=0のダミー変数), 浪人経験の有無(浪人=1, 現役=0のダミー変数)を回帰モデルに含めた。

表8は大学への進学理由に対するロジスティック回帰分析の結果を示している。まず興味深いのは学科系統と進学理由に強い関係がある点である。特に、3つの系統の中でも社会系が極めてはっきりした特徴を示している。すなわち、人文系と比べて社会系では職業志向型の比率が約3倍多い(モデル5とモデル6)。これに対して、知識探究型の比率は人文系の約4割(モデル1とモデル2), 目的曖昧型は約5割(モデル3とモデル4)に過ぎない。加えて、理学系も職業志向型の学生の比率が多く、オッズ比が人文系の約2倍にも達している。

対照的に、出身高校は大学進学の原因に影響を与えているとはいえない。確かに、回帰係数の値を見る限りは、日本大学付属校の出身者と比べて国公立高校の出身者は知識探究型や目的曖昧型の占める割合が低く、職業志向型の割合が高い。一方、私立高校出身者は職業志向型の比率が少なく、知識探究型や目的曖昧型の比率が高い。しかしながら、出身高校の回帰係数はモデル1でも、モデル3でも、モデル5でも統計的に有意でなく出身高校のタイプによって大学進学の原因にはない。

同様に、入学方法と進学理由にもあまり明確な影響は見られない。付属校推薦で進学した学生と比べて、一般入試や付属校以外の推薦で入学した学生は職業志向型の比率が低く、知識探究型や目的曖昧型の比率が

表8：大学への進学理由に対するロジスティック回帰分析

	知識探究型		目的曖昧型		職業志向型	
	モデル1 回帰係数	モデル2 回帰係数	モデル3 回帰係数	モデル4 回帰係数	モデル5 回帰係数	モデル6 回帰係数
学年						
1年	0.14	0.08	-0.83	-0.90 *	0.87 **	0.91 **
(2年)						
3年	0.13	0.07	0.13	0.12	-0.11	-0.11
4年	0.33	0.29	0.17	0.16	-0.46	-0.45
出身高校						
国公立高校 (日大付属高校)	-0.04		-0.07		0.01	
私立高校	0.16		0.17		-0.51	
その他	0.74		-0.84		-0.29	
入学方法						
一般入試		0.14		0.15		-0.20
センター利用入試 (付属校推薦)		0.82 #		0.31		-0.82 #
付属校以外の推薦		0.46		0.82		-1.06
その他の入試		0.39		-0.59		-0.53
学科系統						
(人文系)						
社会系	-0.86 ***	-0.84 ***	-0.67 **	-0.64 **	1.12 ***	1.13 ***
理学系	-0.45 #	-0.52 #	-0.06	-0.16	0.63 **	0.71 **
浪人ダミー	0.81 **	0.77 **	-0.27	-0.40	-0.47	-0.48
男性ダミー	0.03	-0.01	-0.34	-0.39	0.44 *	0.48 *
父親大学ダミー	0.52 *	0.53 *	0.17	0.16	-0.68 **	-0.72 ***
定数項	-1.63 ***	-1.70 ***	-0.55 *	-0.58 *	-0.70 ***	-0.62 *
Log-likelihood	359.23	357.95	413.88	412.11	423.76	422.36
Nagelkerke R-squared	0.10	0.10	0.07	0.08	0.17	0.18
N	359	359	359	359	359	359

*** p<0.01; ** p<0.05; * p<0.10; # p<0.15

注：() はレファレンス・カテゴリー

高くなる傾向を回帰係数の値は示しているが統計的に有意でない。センター利用入試だけが統計的に有意であり、知識探究型の学生の比率を2.2倍ほど増大させ、職業志向型の比率を60%ほど低下させる(モデル2・モデル4・モデル6)。恐らく、センター利用入試で入学した学生の多くは国公立大学を併願していたはずなので、このタイプの学生は大学に専門知識や教養を求める傾向がある。また、学生のバック・グラウンドの影響については、父親が大学卒業以上の学歴を持つ場合、知識探究型の比率は1.7倍に増大するが、職業志向型の比率は1/2に減少する。つまり、高学歴家庭出身の学生は大学に職業や資格のための教育よりも専門知識や教養を身につける教育を求めると言えよう。

これまで述べた結果から見る限り、大学への進学理由は出身高校や入試方法よりも学科系統と強い関連があるようである。すなわち、入学方式や出身高校にかかわらず、大学教育に職業への準備や資格の取得を求める学生は社会系や理学系に進学し、専門知識や教養、あるいは、大学進学の目的自体がはっきりしない学生は人文系に進学する傾向が見られる。

続いて日本大学への進学理由について見てみよう。表9は日本大学への進学理由に対するロジスティック回帰の結果を示している。まず注目すべき点は学科系統が日本大学への進学理由と同様に、強い関係を持っていることである。具体的には、人文系と比べて社会系は目的追求型の学生の比率が2.3倍ほど有意に高い(モデル7・モデル8)。反対に、社会系では教育環境重視型の割合は人文系の5割、ブランド選択型の学生は人文系の6割程度に過ぎない(モデル9・モデル10・モデル13・モデル14)。理学系でも目的追求型の学生の比率は人文系の約1.6倍なのに対して、ブランド選択型の比率は35%にまで有意に低下している。大学への進学理由の分析では大学教育に専門知識や資格の取得を求める学生は社会系や理学系に進学する傾向が観察された。日本大学への進学でも、学びたい分野や獲得したい資格や入りたい部活といった明確な目標を持った学生が社会系や理学系の学科を選択する傾向がある。

表9：日本大学への進学理由に対するロジスティック回帰分析

	目標追求型		教育環境重視型		妥協進学型		ブランド選択型	
	モデル7 回帰係数	モデル8 回帰係数	モデル9 回帰係数	モデル10 回帰係数	モデル11 回帰係数	モデル12 回帰係数	モデル13 回帰係数	モデル14 回帰係数
学年								
1年	-0.14	-0.16	-0.87 *	-0.86 *	-0.36	-0.26	1.19 ***	1.16 ***
(2年)								
3年	-0.66 **	-0.67 **	0.51	0.56	-0.20	-0.16	0.48	0.45
4年	-0.84 *	-0.87 *	0.20	0.23	-0.26	-0.20	1.01 ***	1.02 ***
出身高校								
(国公立高校)								
日大付属高校	-0.16		0.15		0.08		0.06	
私立高校	0.32		0.09		-0.67		-0.04	
その他	0.37		-0.92		-1.70		0.61	
入学方法								
一般入試		0.31		-0.15		-0.41		0.03
センター利用入試		0.67		-0.78		-1.28		0.59
(付属校推薦)								
付属校以外の推薦		-0.08		0.12		-0.78		0.67
その他の入試		0.62		-0.84		-0.46		0.24
学科系統								
(人文系)								
社会系	0.84 ***	0.84 ***	-0.75 **	-0.76 **	0.30	0.27	-0.56 *	-0.57 *
理学系	0.95 ***	0.98 ***	-0.33	-0.34	0.37	0.45	-1.04 ***	-1.15 ***
浪人ダミー	0.04	0.03	0.43	0.43	-0.20	-0.17	-0.44	-0.48
男性ダミー	-0.47 *	-0.48 **	-0.03	-0.03	0.79 **	0.82 ***	0.18	0.16
父親大卒ダミー	-0.30	-0.25	0.34	0.35	-0.23	-0.32	0.13	0.11
定数項	-0.70 *	-0.78 **	-0.97 **	-0.92 **	-1.77 ***	-1.68 ***	-1.46 ***	-1.54 ***
Log-likelihood	422.07	421.50	393.37	391.33	288.70	293.17	379.74	378.43
Nagelkerke R-squared	0.09	0.09	0.08	0.09	0.09	0.07	0.10	0.10
N	359	359	359	359	359	359	359	359

*** p<0.01; ** p<0.05; * p<0.10; # p<0.15

注：()はレファレンス・カテゴリー

対照的に出身高校のタイプは日本大学への進学理由に明確な影響を与えているとはいえない。推定された回帰係数では私立高校出身者は目的追求型の学生の割合が高く妥協進学型の割合が低くなっている。他方、日本大学付属校からの進学者は目的追求型の割合が低く、教育環境重視型や妥協進学型やブランド選択型の割合が高い。しかしながら、いずれの回帰係数も統計的には有意でなく、出身高校のタイプが日本大学への進学理由と関係があるとは言えないのである。

同様に、入学方法にも日本大学への進学理由と明確な関係は見られなかった。一般入試やセンター入試の利用者では目的追求型の比率が多く教育環境重視型や妥協進学型の比率が低い。一方、付属校以外の推薦で入学した学生で教育環境重視型やブランド選択型の割合が高く、妥協進学型の割合が低くなる傾向が見られる。しかし、入学方法の回帰係数はいずれも統計的に有意でなく、日本大学への進学理由と入試方法とに関連はない。表8の大学への進学理由に対しては弱いながらも入試方式に有意な効果がみられた点を考え合わせると、学生が大学に求めるものと日本大学に求めるものにはかなりの差があると言えよう。

興味深いことに、妥協進学型では性別のダミー変数を除くすべての独立変数が有意な効果を示していない(モデル11・モデル12)。唯一、有意な性別変数を見てみると、女子学生と比べて男子学生は妥協進学型の比率が約2.2倍も大きくなっている。つまり、希望した大学に入れなかったために日本大学に進学する学生は、入試方式や出身高校や学科系統や学年にかかわらず、ほぼ一定の割合で存在している。しかし、すべての学科や学年において、このタイプの学生の割合は女性よりも男性で高い。要するに、不本意入学者は男子学生で圧倒的に多くなる傾向がある。

最後に父親の学歴について見てみると、すべてのモデルで有意な効果をしめしていない。要するに、父親の学歴は日本大学への入学理由に全く影響を与えていない。表8で見たように大学進学の原因では高学歴家庭出身の学生は知識探究型の比率が高く、職業志向型の比率が低い傾向があった。しかし、こうした傾向は日本大学への進学理由には存在しない。従って、大学へ進学する目的は父親の学歴によって異なるが、日本大学へ進学した目的は父親の学歴が高くて低くても変わらないのである。言い換えるならば、大学というより抽象的なレベルで学生が求めるものは父親の学歴に左右されるが、日本大学というより具体的なレベルで求めるものは父親の学歴には依存しないといえることができる。

本節ではロジスティックス回帰分析を使い、大学への進学理由と日本大学への進学理由の規定要因について分析をした。本節の分析結果は以下のようにまとめられる。第一に、出身高校は大学への進学理由と日本大学への進学理由に対して影響を及ぼさない。第二に、大学への進学理由と日本大学への進学理由に強い関係をもっているのは学科系統である。第三に、入学方法は大学へ進学理由だけと弱い関係がある。

第6節 おわりに

本稿の目的は日本大学文理学部の学生を対象に行った調査データによって学生の進学経路と大学への進学理由の関係を明らかにすることであった。本稿の分析結果は次のようにまとめることができる。第一に、二変数の分析では出身高校のタイプによって大学への進学理由や日本大学への進学理由に違いが見られた。しかし、多変量解析によって他の変数の影響をコントロールすると、出身高校のタイプは大学への進学理由にも日本大学への進学理由にも影響を与えない。従って、公立高校出身の学生でも私立高校出身の学生でも大学に進学する目的に違いはない。第二に、入学方法は大学への進学理由に影響を及ぼす。特に、センター利用入試で進学した学生は大学に専門知識や教養を身につけるために進学する割合が高く、資格の取得や職業の準備のために大学へ進学する割合が低い。しかし、入学方法は日本大学への進学理由に対しては全く影響を与えない。第三に、学科系統は大学への進学理由と強い関連を持っている。すなわち、社会系や理学系の

学科では将来の仕事や資格の取得を目的として大学に進学する傾向が強い反面、知識や教養の獲得のために大学に進学する傾向は弱い。同様に、学科系統は日本大学への進学理由とも強い関連を持っている。社会学系や理学系の学科の学生は、資格や免許の取得といった明確な目標を持って日本大学へ進学する傾向が強く、大学の知名度といったブランドによって日本大学を選択する傾向は弱い。

こうした分析結果は大学の授業やカリキュラムの展開に対して以下のような示唆をもっている。第一に、学生が大学の教育に求めるものは所属する学科によってかなり異なっている。従って、学生のニーズに合った授業やカリキュラムを実施するには学部や大学を単位とするよりも学科を単位とし、より細かく柔軟性を持たせた方がよい。第二に、入試形態によって学生の大学への進学理由は異なっている。それゆえ、授業やカリキュラムの決定に際しては学部や学科の特質を生かすだけでなく、学生の入学経路にも配慮し学部や学科の内部で複数コースを選択できるのが望ましい。

最後に、注意しなければならないのは本稿の分析結果は日本大学文理学部の学生を対象とした調査データに基づいていることである。現在、日本には文理学部のような文理融合型の学部は数多く存在している。従って、類似の学部でも本研究で見られた学生の進学経路と大学への進学理由の関係が妥当するかどうか検証する必要がある。さらに、学生のニーズに合った授業やカリキュラムを展開する上で、進学経路と大学への進学理由の関係を明らかにすることは、特定の学部だけではなくすべての学部において重要であろう。それゆえ、両者がどのような関係にあるかを他大学や他学部においても分析を重ねる必要がある。これらの点についての検討については今後の研究の課題としたい。

注

1. 各学科の調査票の回収状況（人）の詳細は以下のとおり。

学科	性別		学年					合計
	男	女	1	2	3	4	無	
哲学科		3			1	2		3
史学科	7	5		8	2	2		12
国文学科	13	15	6	4	8	10		28
中国語中国文学科	6	9	4	3	5	3		15
英文学科	26	42	19	14	16	18	1	68
ドイツ文学科	4	19	6	5	3	9		23
社会学科	5	16		3	6	12		21
教育学科	23	12	6	5	11	13		35
体育学科	31	21	2	24	8	18		52
心理学科		3		2		1		3
地理学科	17	5	8		7	7		22
地球システム科学科	1					1		1
数学科	19	11	7	5	7	10	1	30
情報システム解析学科	24	7	1	9	7	14		31
物理学科	3	1			1	3		4
物理生命システム科学科	1	1				2		2
化学科	4	7			9	2		11
無回答		1					1	1
合計	184	178	59	82	91	127	3	362

2. 付属校推薦及び指定校推薦や保健体育審議会推薦を合わせると 25.4%である。

3. 中央教育審議会. 2012. 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）資料編（5／9）平成 24 年 8 月 28 日との比較より。

4. ベネッセコーポレーション. 2005. 平成 17 年度経済産業省委託調査 進路選択に関する振り返り調査一

- 大学生を対象として一との比較より。
5. 表2・3にある「無回答」は、所属学科及び学年が無回答であったため、どの学科系統かは不明である。
 6. 表4・5にある「私立高校」の内訳は、日本大学以外の付属高校とその他の私立高校、「その他」は、海外の高校と高卒認定試験合格、その他である。
 7. 表6・7にある「付属校以外の推薦」の内訳は、指定校推薦と公募制推薦、「その他」は、外国人留学生・帰国生入試と転籍・転部・編入学、その他である。
 8. 分析に使用したソフトはSPSS version19である。

引用文献

ベネッセコーポレーション. 2005. 平成17年度経済産業省委託調査 進路選択に関する振り返り調査—大学生を対象として—

〈<http://benesse.jp/berd/center/open/report/shinrosentakaku/2005/index.html>〉(2012年8月18日取得)

中央教育審議会. 2008. 学士課程教育の構築に向けて(答申)2008年12月24日. 〈http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afeldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf〉(2012年8月18日取得)

中央教育審議会. 2012. 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)資料編(5/9)2012年8月28日. 〈http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afeldfile/2012/09/10/1325048_9.pdf〉(2012年8月28日取得)

枝廣紀子. 2001. 大学新入生の生活変化及び進学志望動機と適応過程との関連: 居住形態による比較(平成12年度発達臨床学専攻修士学位論文概要). 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 48, 407-409

半澤礼之. 2006. 大学進学動機と学業取り組み態度, 学業・授業意欲低下との関連. 武蔵野大学人間関係学部紀要, 3, 123-131

五十嵐敦・浅岡章一. 2001. 大学入学後の生活意識の変化と進学理由との関連について. 日本教育心理学会総会発表論文集, 43, 210

池田文人・鈴木誠・加茂直樹. 2007. AO入学者の追跡調査結果に基づくAO入試の評価: 平成13年度北海道大学薬学部入学者を対象にして. 大学入試研究ジャーナル, 17, 51-55

池田文人. 2009. 入試区分による入学後の学業成績の優劣の検証. 大学入試研究ジャーナル, 19, 95-99

マーチン・トロウ. 1976. 高学歴社会の大学(天野郁夫・北多村一之訳). 第1版. 東京大学出版会. 東京

牧野眞貴. 2011. <研究ノート>スポーツ推薦入学生クラスにおけるアクション・リサーチ—授業改善による学習姿勢の変化. 近畿大学英語研究会, 7, 87-98

松島るみ・尾崎仁美. 2005. 大学進学動機と学習意欲・授業選択態度の関連—新入生を対象として. 京都ノートルダム女子大学研究紀要, 35, 177-187

三保紀裕・清水和秋. 2011. 大学進学理由と大学での学習観の測定: 尺度の構成を中心として. キャリア教育研究, 29(2), 43-55

望月由起. 2008. 高校生の進学アスピレーションに対する特別選抜入試拡大の影響: 高校階層に着目して. キャリア教育研究, 26(2), 49-56

望月由起. 2012. 平成23年度新入生の生活に関する調査報告(2): 大学進学に向けての意識・行動と,

就職に向けての意識に着目して. 高等教育と学生支援: お茶の水女子大学教育機構紀要, 2, 54-63

長澤武. 2007. 大学生のキャリア形成のプロセスに関する研究—志望動機と大学選択の背景. 大学入試研究ジャーナル, 17, 97-102

西丸良一. 2010. 入学者選抜方法による大学の学業成績: 同志社大学社会学部を事例に. 同志社大学教育開発センター年報, 1, 16-25.

太田光一. 2012. 推薦入試合格者のリメディアル教育 (高校と大学の間). IDE: 現代の高等教育, 539, 40-44

奥田孝晴. 2011. 〈教育実践報告〉国際学部の初年次教育の展開と課題. 生活科学研究, 33, 157-169

谷田薫. 2002. カレッジ・コミュニティ調査の分析 (II): 進学・在学理由と生活充実度. 日本教育心理学会総会発表論文集, 44, 268